

日本イコモス賞・日本イコモス奨励賞 2025 選考結果

◆ 2025 年度の賞の選考

2025 年度は日本イコモス賞 4 件、日本イコモス奨励賞 1 件の応募があった。

選考委員会においては、
第1回選考会議(2025年11月19日)、第2回選考会議(2025年12月18日)にて、慎重に検討、協議を行った結果、下記のとおり、日本イコモス賞 1 件および日本イコモス奨励賞 1 件を選定した。

日本イコモス賞・日本イコモス奨励賞
選考委員会

委員長 加藤 友規

幹事 石崎 武志

北河大次郎 豊川 斎赫 丸井 雅子 <50音順>

日本イコモス賞 2025

【受賞者名】 前野まさる

【受賞題名】 日本における建造物および町並み保存と建築教育に関する一連の活動

【推薦者】 鉄矢悦朗 氏

日本イコモス奨励賞 2025

【受賞者名】 岡崎瑠美

【受賞題名】 デジタルドキュメンテーションを通じたエチオピアと日本の文化遺産保存
活用技術交流の促進

【推薦者】 近藤康久 氏

受賞業績（題名）と授賞理由

日本イコモス賞 2025

【受賞者名】 前野まさる

【受賞者経歴】

1932年生まれ。東京藝術大学を卒業後、東京大学大学院に進み、修士課程修了、1963年に東京藝術大学美術学部建築科助手、講師、助教授を経て1987年教授に就任、2000年に退任され現在は、東京藝術大学名誉教授。2001年から2009年までの9年間、日本イコモス国内委員会委員長を務める。

【受賞題名】 日本における建造物および町並み保存と建築教育に関する一連の活動

【受賞理由】

前野まさる（轟）氏は、市民と連携した保存運動の推進者として、また文化財・町並み保存の調査研究における貢献者そして実践的な建築教育者として知られている。

建造物・町並みの保存活動に関して、前野氏の保存活動における最大の功績は、具体的な保存運動への積極的な関与と、市民と共に行う実践的な取り組みである。市民との協働と実践に関しては、旧東京音楽学校奏楽堂や東京駅丸の内駅舎の保存運動など、市民団体を組織し、現場に立って市民とともに保存運動を重ねた。これは、文化財を「専門家だけのもの」にせず、市民の共有財産として位置づけ、その意識を高めた点で重要である。特定非営利活動法人全国町並み保存連盟の理事長などを務め、広範な地域の町並み保存活動に指導的な役割を果たした。文化財保存の調査研究と啓発に関しては、文化財や町並み保全のための調査や運動への取り組みを通じて、日本の近代建築や歴史的町並みの価値を広く社会に知らしめる役割を担った。

2001年から2009年までの9年間、日本イコモス国内委員会委員長を務めるなど、国際的な視点と国内の現場を結びつける役割も果たした。

建築教育への貢献に関しては、単なる知識の伝達に留まらず、実社会での文化財・環境保全の重要性を学生や市民に伝えることに注力した。東京藝術大学における文化財保存学の設立、建築科における建築実測カリキュラムの継続、岡山を中心にしたまちなみ保存調査・提案は前野氏の思想を「ものが残る五要素／保存の三原則」として具現化した。

実践的な教育を重視し、自身の保存運動での経験を教育の場に活かし、現場主義に基づいた教育を行うことで、後進の建築家や研究者に文化財保存に対する高い意識と実践力を育成した。社会教育・啓発に関して「東京を描く市民の会理事長」なども務めるなど、専門的な教育機関だけでなく、一般市民への文化財・都市景観への理解と関心を深める啓発活動にも尽力した。

以上に述べたように、これまでの建築・町並みの保存活動や建築教育への貢献活動を踏まえ、日本イコモス国内委員会は、「日本における建造物および町並み保存と建築教育に関する一連の活動」の業績を高く評価し、前野まさる氏に「日本イコモス賞2025」を授与する。

【参考資料】

- 1) 著書 前野まさる建築論集刊行委員会、前野まさる建築論集、2020
- 2) 著書 前野まさる、保存運動の原点と広がり、上野の「明治」を守る、上野奏楽堂物語、東京新聞出版局、1987
- 3) 著書 東京芸大まちなみ倶楽部、住まう人に学ぶ、岡山まちなみづくり展、2000

日本イコモス奨励賞 2025

【受賞者名】 岡崎 瑠美

【受賞者経歴】

1984年生まれ。芝浦工業大学建築学部建築学科准教授。博士（学術）。2007年9月慶應義塾大学環境情報学部卒業、2010年3月同大学院政策・メディア研究科専攻修士課程修了、2013年9月同大学院博士課程退学、2015年慶應義塾大学より博士（学術）の学位取得。2010年4月から2011年3月まで、慶應義塾大学SFC研究所訪問研究員。2011年4月から同年9月まで、同大学院政策・メディア研究科助教などを経て、2018年4月から2021年3月まで、芝浦工業大学建築学部建築学科特任講師。2021年4月から現職。

【受賞題名】 デジタルドキュメンテーションを通じたエチオピアと
日本の文化遺産保存活用技術交流の促進

【授賞理由】

岡崎瑠美氏は建築史を専門とし、20年以上にわたりエチオピアを中心としたアフリカ各地で研究に従事してきた。その研究活動の特徴は、三次元デジタルドキュメンテーションを活用した建築遺産の記録・分析手法の開発と確立にある。デジタル・ヘリテージ分野における氏の業績は目覚ましく、ICOMOSの国際科学委員会であるCIPA Heritage Documentation等へ積極的に参加し、最新動向を踏まえた研究展開とともに、国際的な研究ネットワークを構築してきた。近年はアフリカ諸都市へも対象を広げ、アフリカ型都市建築の保存手法の開発に着手している。さらにその射程は、日本の大都市中心部や人口減少が進む地方都市へも広がり、多様な地域での調査・記録を通じて、現代都市における保存と再生の調和を実践的に追求している。

岡崎氏の研究視座の強みは、地域住民の生活環境を建築遺産と不可分な保護対象として見据えている点にある。これはボトムアップ型の保存・活用モデルの構築を目的としたものであり、持続可能な社会の実現を目指す、いわば社会的包摂を重視した文化遺産マネジメントの新たな方向性を示すものとして高く評価できる。また、科学技術振興機構（JST）のさくらサイエンスプログラムを通じたエチオピアと日本の建築学生との相互交流事業など、若手研究者の育成と国際交流においても顕著な成果を挙げている。デジタル・ヘリテージは最新技術を用いた現代的な技法であり、学問領域や社会への具体的なインパクトの確定にはなお時間を要する側面もある。しかし、連携が困難な諸国との協働や、歴史的建造物の保護に留まらない現地教育への注力といった一連の活動は、建築史、社会史、文化遺産論などの分野を横断して将来に参照されるべき質を備えている。以上のように、岡崎氏はデジタル・ヘリテージ分野の第一線で活躍すると同時に、人材育成や地域協働にも配慮した実践を積み重ねており、今後のさらなる貢献が期待される。よって、日本イコモス国内委員会は、岡崎瑠美氏の「デジタルドキュメンテーションを通じたエチオピアと日本の文化遺産保存活用技術交流の促進」の業績を高く評価し、「日本イコモス奨励賞2025」を授与する。

【参考資料】

- 1) Ishizaki, H., Okazaki, R., Shimizu, I., 2025. Exploring the Impact of Unexpected Learning Outcomes Across Cultural and Architectural Differences: A Comparative Study of Japan and Ethiopia, In 2025 ASEE Annual Conference & Exposition Proceedings, American Society for Engineering Education.
- 2) Okazaki, R., Girmay, T., Shimizu, I., 2024. Documenting the Architectural Heritage of Armenian Sefer, Addis Ababa. In proceedings: AFRICA24. Nairobi, Kenya, November 2024.
- 3) 清水郁郎, 岡崎瑠美, 2024. JST さくらサイエンス2023 年度活動レポート（一般公募プログラム）第034号（Cコース）, 東京デジタル・ヘリテージ ワークショップ, https://ssp.jst.go.jp/report/2023/k_vol034.html